

広域の学習環境の構築へ努力した10年

自律プロジェクト - 生徒に自律スキルを身につけさせるには -

滝高等学校・中学校 栗本直人教諭

<プロジェクト以前>

私は20年前に就職したとき、SORD M68というコンピュータを使い始め、その後、NEC、MAC、NEXT、SUNなどを活用してきた。そうした中、平成5年(1993年)NEXTのユーザー会で南山大学の後藤邦夫先生からインターネットのすばらしさを聞き、藤田保健衛生大学の伊藤渉先生から、SUNインターネットサーバの設定を伝授いただいた。電子メールが世界中をほんの数秒で送受信されるのを見た瞬間、インターネットが教育を変えるという予感がした。100校プロジェクトの選定からは外れたが、平成6年12月の東海スクールネット研究会の設立に参画。多くの先生方とインターネットの教育利用を研究してきました。

実践の経過、教訓

CAIに反発して

私が自律プロジェクトに心が傾いたのは、一言で言うとCAIへの反発が背景にありました。CAIあるいはCAIをWebベース上で行う動きもありますが、これは単なるドリル学習で私として魅力の沸くものではありません。ドリル学習がすべて役にたかないと否定するわけではありませんが、少なくとも「子どもたちの自律的な学び」にはつながりません。私はそのような子どもを縛るだけのコンピュータの活用の仕方が嫌いでした。そこで、宮澤賀津雄先生(現・早稲田大学IT教育研究所)・奥村稔先生(現・札幌北高等学校)らが考えられた100校プロジェクトの共同企画である自律的意見交換プロジェクトに参加したわけです。当時の私は参加させていただく方で、全国約10名の有名な先生が参加し、広域での学習環境をいかに作るかということを中心に議論されました。例えば、「海外ないし複数の学校間でプロジェクトを起こすにはどうすればよいか」、「メーリングリストはどういう構造・形態にするのがよいか」、「子どもたちの自律的活動をどうすれば学びとして形成できるか」といったことについて喧々



自律プロジェクト

自律プロジェクトは、生徒の自律(自分で考え、発言・発表し、行動する)を促すために、他校・海外・異年齢の人達との交流や探求活動を通して、学校の枠を超えた広域の学習環境を構築しようとする実践である。大きくは、各学校が各学校の課題と意志のもとに掘り下げる「地域分散プロジェクト」、それらの課題を持ち寄り、話し合うことにより、広域の学習環境づくりを目指す「広域学習環境構築プロジェクト」からなる。

そのため、毎年「高校生の集い」(2泊3日程度)を北海道、東京、名古屋、沖縄、海外などで順次開催した。プロジェクト参加校の生徒と教師が集い、高校生が企画・立案したスケジュールで地域分散プロジェクトの活動報告や「広域統合」の課題・方策などが話し合われる。生徒が司会をし、発表担当の生徒は夜遅くまでその準備にあたるのである。

参加校を結ぶ手段として、教師用のメーリングリストはもちろん、生徒用のメーリングリストも設置。しかも、生徒用メーリングリストは、プロジェクト運営用、日常的な活動報告・交流用などいろいろなレベルに分けられている。

また、平成11年(1999年)から「ネットワーク新聞」を電子メールで発行。編集担当校が活動状況のニュースを読みやすい形でまとめ、参加校に配信している。過去の記事は、生徒用のホームページにアップされ共有化が図られている。<http://www.nextage.ne.jp/>

なお、滝高校では11年度から高校生とシニアとの異世代間交流プロジェクトを地域分散プロジェクトとして実施する。14年度(2002年)にはその活動が認められ、経済産業省の情報化月間で総務大臣表彰されている。<http://www.taki.ed.jp/senior/>

謂々と議論していました。これは、私には相当の衝撃で、平成8年以降の東海スクールネット研究会 (<http://www.schoolnet.or.jp/>)のすべての広域プロジェクトの原型となったことは間違いありません。

進学校での教科「情報」の取り組み 自律プロジェクトの試み

私たちは今、自律ないし自律スキルのことを「自分でものを考え、発言・発表し、行動できる。そして自分の将来をまじめに考えられる」といった概念で捉えています。そうすることにより、進学校ではお荷物の教科「情報」も、進路と情報が合体して、重要な教科となってしまう訳です。つまり、将来の日本の社会を担う子どもたちに、自律スキルを身につけさせたい。受験教育の弊害を克服し、良い大学は出たが社会では使い物にならないということにならないようにしたい訳です。

ただ、残念ながら本校も一般の教科学習においては、本来の学びには、ほど遠く、大学入試に備えたドリル学習の繰り返しをしています。平成10年度に「日本の情報教育のプロトタイプを作ろう」という志で作ったメディアコミュニケーションセンターも、15年度まで、いろいろな試みはされました。しかし、教科「情報」の授業、つまり、「Career Preparation(進路学習)」という名の自律プロジェクトがはじまるまでは、進学校の窓際センターであった訳です。

これまで課外活動として実施してきた自律プロジェクトを、進路学習、英語、情報といった授業の中で行おうとしています。実施体制は、日本・米国・台湾・ネパールの4か国の高校生が参加し、インターネットや各種ICT機器を使った広域の学習環境下で、自律スキルを身につけてゆきます。進め方は、生徒が自己紹介をする自分が関心を持つ職業のホームページを作成し、サイトにアップする 電子メール(英語)で希望する職業についてプレゼンテーションする 英語で関係した論文を書く 電子メールで話し合う、といった具合です。

「想像以上のパワー」がネック

自律プロジェクトを授業の中で行うには、泣きそうになるほどのパワーが必要です。一般の生徒の理解、先生側の理解、海外交渉など、施設が整ったとはいえ、課題は山積みといえます。インターネットという武器を持った先生とそうでない先生、また他校や海外との交渉能力を持っている先生と持っていない先生の差はまだたくさんあります。

10年間を振り返って

「苦い経験」がICT活用の原動力

私がICTをずっと活用し続けてきたのは、第1はCAIに対する反発です。第2は、本当の学びを教えたいという気持ちと受験担当者としての心の葛藤です。100校プロジェクトに出会う前の10年間は、高2・高3の受験物理を担当していました。当時は受験に勝つため、試験をたくさんしました。しかし、試験をすればするほど、子どもとの距離は離れていき、「物理を教えているのか、受験のテクニックを教えているのか」という自己矛盾を感じ、本当の学びが成り立っていないという自分に対する苛立ち、反省があったわけです。第3は、東海スクールネット研究会の先生方との出会いです。例会のあとで、毎回、飲み会をし、出るのは愚痴です。そうした話を聞くほどエネルギーが沸き、頑張れました。

<成功の秘訣>

今、やっていること、あるいは、やろうしている事が成功したかどうかは別にして、この10年間、東海スクールネット研究会のいろいろな現場の先生・大学の先生・企業の方々の支えはたいへんな励みとなりました。あえて言えば、頑張れるためには、本当にお互いがGIVE&TAKEできる人的ネットワークの構築だと思います。先進的な方の教え、お互いの情報交換など人といろいろと議論をする中で、次への方向性が見えてくるものです。そして、マンパワーほど高いものはないということを経験に銘ずるべきではないでしょうか。さらに、生徒といかに、「本来の学び」の構築のために、「学習」という「遊び」いや「活動」を楽しく進められるかです。つまり、「Effective Communication」とか「Effective Presentation」とか「Critical Thinking」とか「使える英語」などの自律スキルをつけさせる活動も、校内からのいろいろな不理解・無関心などに負けず頑張れるかも大切だと思います。それを校内へいかに広報するあるいは管理職に理解いただくかも大きな課題です。



「高校生の集い」で海外の高校生たちと